

## 紙碑 柿本典昭先生をしのぶ

木庭元晴

柿本先生は昨夏の八月三日（二〇一二年）に亡くなった。享年八十三歳である。ご長男によれば、急遽入院されて翌日のことで安らかな最期だったそうだ。通夜、告別式は金沢市内で催され、多数の教え子が駆けつけた。金沢大学と関西大学が主だったものであるが、漁業地理学などの分野で活躍する若手研究者も十名近く集まった。

柿本先生は関西大学に昭和五十六年十月に赴任され、平成十一年三月まで計十七年六ヶ月、史学・地理学科地理学専修の時代に在職された。当時の地理学教室の教員構成は、河野通博、末尾至行、橋本征治の各先生を中心に、在職中に亡くなった山崎寿雄先生、矢守一彦先生、この亡くなった先生方の後任として、木庭元晴、村上雅康先生、そして、河野通博先生の後任としての高橋誠一先生であった。ちなみに柿本先生は、在職中に亡くなった文化地理学の泰斗藪内芳彦先生の後任である。藪内先生は柿本先生の恩師の一人で、金沢大学ご在職中に助手を務めておられた。

史学・地理学科内には、横田健一先生を始めとして魅力的で個性豊かな先生が多数おられた。優れた学者が小さな学科にひしめいていた時代である。日本洋学史の有坂隆道、日本近世史の津田秀夫先生は教室会議で大きな声で破天荒に正義漢ぶりを発揮しておられたが、いつもそれにニコニコして賛同しておられたのは柿本先生である。ほくもこのお二人が大好きで、柿本先生を同士のよう感じたものである。いまはここにあげた先生方は残念ながら皆鬼籍の人である。

現役と卒業生からなる関西大学地理学研究会では毎年末に研究発表会を催している。高野山での一年生の研修会が取りやめになって、それに代わって卒業論文作成に向けての機会を文学部セミナーとして、少額ながら学生に弁当代を出して実施することになった。これを機に毎年末の研



究発表会と合体することとし、研究発表会当日にその文学部セミナーをこれまで開催してきた。このセミナーでは教員が輪番で卒論講話を持つようになった。柿本先生は先生の学生当時の思いを素直に語られた。当時、盛んであったマルクス主義経済学から書けないかなど悩んでいた時期に、兄上が鹿児島大学水産学部在職されていた関係で鹿児島県に出かけて、兄上の友人と薩摩半島南部の漁村を巡られた。それが契機で水産地理学を選ぶことになったということである。

西日本漁業経済学会は一九五九年に発足した。それが地域漁業学会に発展した最初の会長が柿本先生である。この学会には学会賞として、柿本賞がある。学会の規約を引用すると次のようである。

地域漁業学会功労賞（柿本賞）：当該分野において多年にわたり活動や研究を行い、地域漁業の発展に対し多大に貢献したと認められるもの。なお本賞は、当学会創設に尽力された名誉会員柿本典昭氏の名を冠するものである。

柿本先生は学生に慕われた。関大に赴任されてからも多くの研究者を育てておられる。「ぼくは劣等生が好きなんや」といいつつ、多くの学生を学問への道に誘われた。女子学生が先生のお部屋にいることが多かった。一緒にお饅頭を食べておられた。先生のお部屋にはいつもお饅頭があった。卒論を担当する教室の会議でもよく「ぼくは何々さんを指導したい」とおっしゃった。女子学生だけでなく、「劣等生」の面倒をよく見られた。毎年、卒業した学生達と旅行に出でおられた。

二〇〇五年夏、奥様が亡くなった、そのとき、お電話を頂いた。ぼくには何か締め切り原稿があつて車で移動する余裕が無く雷鳥で出かけ、車中では原稿を書いていた。そして通夜の式場に近づいた時、遠くから柿本先生が笑顔でぼくに手を振っておられた。来て良かったと思った。そして、柿本先生が亡くなった時に柿本先生の笑顔を思い出した。笑顔を見たくて元学生三名と車で金沢に向かった。車中、柿本先生の脱線ぶりの話で持ちきりだった。合掌。

（関西大学文学部教授）